

源造は奥の客間で横たわっていた。

「伯父さん、どうなさったんですか。元気をだし
てください」

「転んだとたんに体の力が抜けてしまった。何も
もないところで転ぶなんて、やっぱり年には勝て
ないよ」

「何言っているんですか。私だって何にもない
みちで転んだことがありますよ。年のせいじゃあり
ません。そんなことを言ったら、伯母さんが心配
するじゃありませんか」

「いや、こうして横になっているのが一番楽なん
だよ」

源造の口調は弱々しかった。頬の肉も落ちたよ

うだし、顔色も悪い。

「今日はこのまま帰ろうかと思っていると、源造
が布団の上に半身を起こした。

「あかつき荘はどうだ、変わりないか」

「はい、どこも傷んでいないし、もめごともあり
ません」

「志津は元気にやっているか」

「矢島さんですか、お元気ですよ」

源造の口から志津の名前が出てきたことが
意外だった。この家で志津のことを話題にするの
も初めてだった。

「矢島さんのことで何か気になることがあるので
すか」榮子が聞き返したとき、芙美が直哉を連れて

部屋に入ってきた。

「庭で鯉と遊んでいたんだけど、陽射しがきつい
から無理に入れたのよ。何か冷たいものでも持つ
てこさせるわ」

芙美は屈託のない表情で額の汗を拭ってい
る。榮子はこのおっとりした伯母が好きだった。

源造と結婚した当時のことを聞いてからはなお
さらだった。その芙美の前で志津のことを聞くの
がためらわれて、榮子は口をつぐんでしまった。

それから以後、源造の病状は一進一退を
繰り返している。榮子の顔を見ると機嫌がよくな
ると芙美に言われて、午前中の涼しいときにたび
たび源造の見舞いに出かけた。芙美もその間に

用事が片付くと喜んでいる。

源造は榮子の顔を見るとすぐにあかつき荘の
ことを聞いた。そして、志津のことも何度も口に
した。

「伯父さん、そんなに矢島さんのことが気になる
なら一度ここに来てもらいましうか」

何度目かの見舞いするとき思いあまつて
切り出した。

「いや、会いたいわけじゃないんだ。ただ志津が
元気にやっているかと思っただけ」

「それじゃ、矢島さんに何か伝えておきましょう
か」

「元気でやっているなら、それでいいんだ」

源造は何をそんなに気にしているのだろうか。
栄子は源造の態度が気になってたまらなかった。

数日後、預かってきた宅配物を届けるために
志津の部屋を訪れた。

「矢島さん、源造伯父さんのことでお話がある
んですが」

栄子は迷ったあげく声をかけた。源造が寝込んで
いることだけでも伝えておこうと思ったから
である。

志津は驚いたようだったが、快く栄子を部
屋に招き入れた。

夕方玄関で立ち話をしたことはあるが、部屋

「源造さんがどうかしたの」

お茶の用意をしていた志津が気がかりな
表情で振り返った。何も言い出さない栄子を
訝ったのかもしれない。

「このところ、伯父さんの具合がよくないんです」

「えっ、源造さんが。よほど悪いの」

「何だか急に弱ってしまつて。伯父さん、志津は
元気にしているかって、しきりに矢島さんのこと
を気にしているんです」

一気に言つてしまつて、栄子はほつと肩の力
を抜いた。

「あの人がそんなことを」

志津は一瞬大きく目を見開き、すぐにその目

に入るのは初めてである。壁際に総桐の和箆笥と
三面鏡が置かれていて、窓際には大きなベッ
ドがある。栄子は見てもならないものを見てしま
つたような気がして思わず目を伏せてしまつた。
カーペットの上には、着物の手入れをしていたの
か、鮮やかな緞の着物が何枚か広げられている。
「ごめんなさい、散らかつていて」

志津は手早く室内を片付け、押し入れの中から
卓袱台を出してきて広げた。

ベッドに背を向けて座つた栄子は落ち着かない
気分だった。和風と洋風が奇妙に入り混じつた
部屋の雰囲気は圧倒され、源造のことを話し出す
きっかけを失つていた。

を伏せた。しかし、栄子は志津の目が潤んだのを
逃さなかつた。

「矢島さん、伯父さんは何をそんなに心配してい
るのでしょうか。心あたりがありますか」

「私はここにもう二十年以上住んでいるの。
源造さんとも長い付き合いだから、心配してくれ
ているのだと思うわ。単にそれだけのことよ」

栄子の視線を逸らすように、志津は立ち上がった。
隣の部屋の流し台の前で立ち竦んでいる。

「でも、矢島さんはりっぱな大人で、いくつもの
店の経営者なんですよ。心配する事つてないと思
うんですよ」

「私は若いとき、源造さんの店で働いていたの。

自分の店で使っていたから、娘のように思っ
てくれているのよ」

「そうですか」

志津の口からそれ以上のことを聞くことは
できなかった。

栄子が次に源造を見舞ったとき、源造はいくら
か元氣そうに見えた。クーラーがほどよく効いた
部屋の中で、籐椅子にゆったりと腰かけて栄子を
迎えた。

「伯父さん、矢島さんに伯父さんが心配して
いるって伝えておきましたよ」

芙美が用事があるからと出かけた後で、源造の

耳もとでささやいた。

「志津は何か言っていたかい」

でしやばったことをしてと叱られるのではない
かと不安だったが、源造は表情を変えずに穏や
かな口調で言った。

「伯父さんの病氣のことをとても心配していま
した。伯父さんが矢島さんのことを気にしている
って伝えたら、一瞬目を潤ませて、源造さんとは
古い付き合いだから心配してくれているんだっ
て言っていました」

「そうかい」

源造は何度もうなずいてから、ゆっくりと
立ち上がった。南に向いている窓のカーテンを

開け、ベランダに吊してある折り鶴蘭の鉢植えに

目をやった。

栄子の座っている位置から源造の顔の表情

を見ることはできない。しかし源造は志津のこと
を考えているに違いない。栄子は源造の背中に
向かって、少しだけ声を大きくした。

「伯父さん、私、これからずっとあかつき荘の
管理人をしていくつもりなんです。だから、伯父
さんの気がかりなことを教えてください。私にで
きることは何でもします。伯父さんの心配ごとも、
矢島さんのことも、本当のことが知りたいんです」
源造はしばらく動かなかった。栄子の言葉を
反芻しているようでもあり、まったく別の想いに

沈んでいるようでもあった。

ようやく振り返ったとき、源造の目に不思議な
光が宿っていた。栄子の顔を見つめたまま元の
場所に戻り、再び籐椅子に深く腰を降ろした。そ
して、ふつと視線を宙に浮かせると、そのままの
姿勢で話し出した。

「志津には感謝しているんだよ。志津と知り合っ
たとき、わしは五十歳で、無性に年のことが気に
なりだしたときだった。それまで夢中で働いて
きた反動かもしれないが、これからの日々が確実
に死に向かって進んでいくと思うとたまらない
気持ちだった。働くことも虚しくて、生きていく
ことも虚しくて、一時は本気で仏門に入ることが

かんが
考えたよ」

「伯父さんにそんなときがあつたなんて信じられ
ません」

「しかし、志津と出会つたとたんそんな気持ちは
吹き飛んでしまった。妻や家庭や仕事のことさえ
忘れて、一人の男として志津を愛してしまつた
んだよ。志津に女の幸せを与えることと、一人前
の経営者に育てることがわしの生きがいになつ
た。下り坂を迎えた自分がこれほど女に夢中に
なれることが嬉しかった。諦めかけた人生を
もう一度やり直すことができたのは志津のおかげ
なんだよ」

「伯母さんはそのことを知っていますか」

は、矢島さんとの思い出を残しておきたかったか
らだつたのですね」

源造はもう何も言わなかった。

そのとき、ドアの外で人影が動いた。芙美が
帰ってきたのかもしれない。今の話を
聞かれなかったかと不安になった。しかし、もう
時効になつてはいるはずの古い話である。今の
源造は残りの人生を芙美と二人で静かに
暮らしている。今さら芙美も咎めたりはしないだ
ろう。

「伯父さん、元気になってよかったですね。今度
は伯母さんが寝込まないように気を付けてくださ
いね」

「芙美は知らないと思う。わしが外で何をしよう
と気にしない女だつたし、何日も家に帰らない
のは毎度のことだつたからね」

「それから矢島さんとはどうなつたのですか」

「ちようど十年で別れたよ」

「そんなに愛していたのに、別れることができた
のですか」

「男は愛している者の幸せを一番に考えるも
のなんだよ」

別れ話は源造のほうから切り出したに違いな
い。そのときの辛さを思い出したのか、目を
閉じた源造の顔がかすかに歪んだように見えた。

「それで分かりました。あかつき荘を壊さないの

そう言つて玄関を出る榮子に、芙美はいつもと
変わらない笑顔を見せた。

(以上11月25日放送分)